

連載 システムの肥大と人間の想像力

サイバーリテラシー研究所代表（サイバー大学 IT 総合学部教授）  
矢野 直明

はじめに

旧知の本メールマガジン編集長から「矢野さんが提唱するサイバーリテラシーと情報システム学会の理念は似たところがある。サイバーリテラシーについて連載してみませんか」とのお誘いを受けた。なるほど、情報システム学会の理念には「真に人間中心の情報社会を実現することに貢献する」と書いてある。

わが意を得たり（^o^）、と引き受けたのは、あるいは軽率だったかもしれない。私は技術の専門家でも、法律の専門家でもない。一介の編集者である。いささか逡巡気味ではあるが、編集者として、あるいはジャーナリストとして、ここ 30 年、情報社会の周辺を徘徊してきたことだけは確かである。情報社会のリテラシーとしての「サイバーリテラシー」を提唱してすでに 10 年近くにもなる。せっかくの機会をいただいたのだから、サイバーリテラシーの観点から気になっている現代社会のあれこれを書きつけて、情報社会や技術の最先端におられる諸兄弟のご意見をお伺いしたらどうかと思い直した。

当方が愚問を發し、読者諸兄弟の賢答をお願いする「愚問賢答」方式ですね（^o^）。どうかよろしく。サイバーリテラシーについては、折々に説明もしますが、詳しくはサイバーリテラシー研究所のウェブ（<http://www.cyber-literacy.com/ja/>）や拙著『サイバーリテラシー概論』（知泉書館、2007）を参照してください。

なお私のメールアドレスは、[zano@cyber-literacy.com](mailto:zano@cyber-literacy.com) です。（編集部注：メールアドレスの @ は [zano@cyber-literacy.com](mailto:zano@cyber-literacy.com) に変更しています。）

第1回 「等身大精神」の危機

もうだいぶ前の話になるが、東京証券取引所をめぐるみずほ証券の株誤発注事件は、その直前に明るみに出たマンション耐震強度偽装事件と並んで 2005 年を象徴する出来事だった。

みずほ証券の社員が人材派遣会社株の売り注文を「61 万円で 1 株」とすべきところを「1 円で 61 万株」と入力ミスし、東証のシステムが取り消しを受け付けなかったために、すべての売買が成立、最終的に買い戻した分を除き、みずほ証券は約 400 億円の損害を受けた。

巨大システムが人間の手作業とは桁外れに早いスピードで物事を進めて行く現状を、

人びとに強く印象づけたが、いくつかの証券会社は誤発注を奇禍として大儲けをした。最初に、このようなシステムの上に乗って巨利を得ることの是非を考えてみよう。

事件が起こった翌朝、たまたまフジテレビの番組「とくだね！」を見ていたら、メインキャスターの小倉智昭氏が証券会社に対して「武士の情けも義理人情もなにもない」とつぶやき、ゲストの女優、高木美保さんが間髪をいれず、「そんな人とは結婚したくない」と言った。与謝野馨金融担当相（当時）が「誤発注を認識しながら、間隙をぬって自己売買で株を取得するのは美しい話ではない」との談話を発表したのも同じような感情に基づいていただろう。

証券会社は利益を返却すべきだという意見もあり、一時はそのような動きもあったが、すでに行われた取引をなかったことにするのはシステムの的に不可能で、その後どう処理されたのかはよく分からない。

一方、これは正常なビジネスルールにのっとったもので、“敵失”に乗じて利益を得たとしてもなんら不都合はないという意見も強かった。これはこれで筋の通った意見でもあるが、やはりひっかかるところがある。

証券取引所が場立ちで賑わっていたころなら、こんなミスは起こらないだろうし、たと言え間違いだとしても、誰もがその場で誤りを認め、それで終わったに違いない。ケアレスミスが巨大システムではとんでもない暴走を起こすということである。

だから、この問題を最近（2010年7月）横浜市の大学院大学で取り上げ、学生たちの意見を聞いたところ、ほとんどの学生が「正常なビジネスで、なんら問題ない」と答えたのにはいささかショックを受けた。そういう考えはあっていいけれど、全員がそうだというのがひっかかる。今の若者たちは、現実世界がサイバー空間に乗っかっており、多くがシステムに動かされているIT社会の現状を、もはや所与の環境と考え、その中で最適解を見つける生き方になじんでいる。しかも、そういう傾向は年毎に増えているように思われる。こういう状況をどう考えればいいのか。これが第一の愚問である（情報システム学会のめざす「人間的なシステム」との関連ですね）。

事件を別の側面から見てみよう。

ほんのちょっとした、だれにでも起こりがちなコンピュータ入力ミスで、あっという間に会社に400億円の損害を与えてしまった当の本人はどう責任をとればいいのか。その後の人生はどういうものになるのだろうか。彼あるいは彼女（若いエリート女子社員だとか、下請け社員だとかの噂が流れた）が定年まで在籍しても、給与総額は400億円の百分の一を上回るかどうか。ここでは会社にかけた損害を賠償するという、ある意味でまっとうな考えはまったく意味をなさない。まさに打つ手なし、である。

かつてエコロジーの世界で、「等身大の技術」ということが言われた。大型船でマグロを一網打尽にするのではなく、食べるに必要な分だけ一本釣りしながら自然のおすそわけにあずかるという共生の知恵だったが、いま問題なのは、コンピュータという精神

機能拡張の道具が、私たちが途方もない世界につれて行き、そこでは「等身大の精神」が危機に瀕していることである。従来 of 倫理を支えてきた社会システムに地すべりの変動が起こっている。

この点は、マンション耐震強度偽装事件にも共通している。設計の中核部分である「構造計画書」の数値が偽造されたが、偽装の張本人である一級建築士をはじめ、設計事務所、建物を建てた建設会社、事業主である販売会社、背後の経営コンサルタント、計画書の審査を担当した民間検査機関など、関係者は責任のなすりあいをするばかりで、だれも安全維持の責任を痛切に感じていないようだった。

ここでも、一つの行為がもたらす結果があまりに膨大なために、建築士にしても、欠陥マンション量産業者にしても、犯した罪の責任をとりようがない。逆に言うと、責任のとりようのないことを何の痛痒も感じずに行える状況に置かれている。株誤発注事件はうっかりミス、マンション耐震強度偽装事件は人為的な「偽装」だったけれど、引き金の軽さと結果の重さという点では、よく似た構造をしている。

こういう社会システムに支えられていると、コツコツものを作り上げるといった仕事のありようが、どうにも馬鹿らしくなってくるのは否みようがない。誤発注事件に乗じて一挙に20億円を儲けた若者もいたのである。

こういう状況をどう考えるか、というのが第二の愚問である。

## 連載 システムの肥大と人間の想像力

### 第2回 TigerText と「情報の時効」

サイバーリテラシー研究所代表 (サイバー大学 IT 総合学部教授)

矢野 直明

2010年春、アメリカで「タイガーテキスト」という 아이폰 (iPhone) のアプリケーションが話題になった。日本ではまだ利用できないようだが、このソフトウェアを使って送ったメールは、送信者が設定した期限がたつと、自分の端末からも、相手の端末からも、さらには特別に設置されたサーバーからも削除される。存続期間は送信者が設定できるし、相手を読んだら1分後には消えるように設定もできる。

ふだん私たちがやり取りしているメールは、送信者が削除しても、相手が保存しておけば存続するし、プロバイダーなどのメールサーバーには一定期間、保存されている。タイガーテキストを使って送信したメールは、サイバー空間から完全に削除できるというのが工夫である。

このアプリケーションを開発したベンチャー企業、X Sigma Partners の創業者、ジェフリー・エバンズは開発の意図を、「しゃべるように気軽に書いたテキストが、文脈から切り離されて、思いもよらぬ形で本人を直撃することがよくある」、「ビジネスや一般のメールのやり取りでも、相手の端末からすぐ削除してもらいたいと思うことは多い」などと述べ、2010年2月の製品発表会では、太陰暦で今年の干支がトラであることに言及し、「タイガーテキストで送ったメッセージは本物のトラと同じように追跡が難しい」と語ったらしい(1)。

米 CNN テレビは有名なドラマ「スパイ大作戦 (Mission:Impossible)」を持ち出して紹介した。ドラマの冒頭、現場のスパイたちに「おはよう」で始まるテープで指令が伝達されるが、「君、もしくは君のメンバーが捕えられ、あるいは殺されても、当局は一切関知しないからそのつもりで。成功を祈る」と続く録音の最後は「なおこのテープは5秒以内に消滅する」というセリフだった。

「タイガーテキスト」という命名は、プロゴルファー、タイガー・ウッズのセックス・スキャンダル発覚前だと製造元は言っているが、タイガーという名前と発表のタイミングから、このアプリケーションはタイガー・ウッズのスキャンダルとの関係でメディアを大いににぎわせた。

タイガーテキストを使ってメールを送れば、ウッズのように、特殊な関係になった相手に送ったメールの内容を、後に対価を得て暴露されることもないわけである。同ソフトで送られてきたメールはコピーしたり、転送したり、保存したりできない(工夫すれば、もちろん別に保存できるが、ふつうにタイガーテキストを使っていれば保存できないようになっている)。

「サイバーリテラシー」では、デジタル情報環境であるサイバー空間のアーキテクチャーの特徴を以下の3点に絞り、これを「サイバーリテラシー3原則」と呼んでいる。

第1原則 サイバー空間には制約がない

第2原則 サイバー空間は忘れない

第3原則 サイバー空間は「個」をあぶりだす

今回のテーマに関係するのは第2原則である。

日常、私たちが発言したことは、ほうっておけばすぐ忘れられる。しかも、回りにいるごくわずかな人にしか届かない。それを記憶するためには、何度も反復するなり、メモをとるなり、録音するなり、ビデオに収めるなり、なんらかの努力を払わなければならない。そういった努力の一環として、さまざまな出来事を記録し、多くの人に伝えるためのメディアが発達したが、アナログの時代では、新聞は1日たてばせいぜい包装紙代わりに使われるだけで、ラジオやテレビは聞きっぱなしが普通だった。だからこそ私たちは「ひとのうわさも75日」、「旅の恥は掻き捨て」などと、安心していられたわけである。情報を記録し、伝達し、保存するためにこそ大いなる努力が必要だった。

サイバー空間だと、これがまるで逆になる。いったんデジタル化された情報は、ほぼ永久に消えない。しかも瞬時に遠くまで伝えられる。サイバー空間上の自分の発言を削除しても、その情報はすでにコピーされ、どこかに保存されているだろうから、並大抵の努力では削除できない。いや完全に消し去ることは、すでに不可能だといっていい。サイバー空間では、情報を記憶、あるいは記録することにはほとんど努力を必要とせず、逆にそれを削除するためにこそ大いなる努力が要請される。

「サイバー空間は忘れない」ことは、サイバー空間のたいへん便利な特徴だが、一方で、これがプライバシーなどやっかいな問題も生んでいる。しかし、技術で作られたサイバー空間を技術で変えることは不可能ではないはずである。私たちは、そろそろサイバー空間のアーキテクチャーそのものを抜本的に考え直してもいいのではないか。たとえば、サイバー空間の情報にも「時効」を設定できないだろうか、というのが今回の愚問である。

タイガーテキストは、メールだけという限定はあるものの、「サイバー空間は忘れない」という「アーキテクチャー(コード)」を一部「サイバー空間も忘れる」ように書き換えたとも言えるだろう。ハワード・スターンのような色事師は、タイガーテキストをすばらしいツールだと宣伝したし、タイガーテキストで人びとはより容易にうそをついたり、人をだましたりするようになると、いささか心配気に論評した人もいる。そういう点も含めて、何かいい方法はないものかと思うわけである(2)。

私は、サイバーリテラシーの課題として「現実世界の復権とサイバー空間の再構築」を挙げ、サイバー空間との接触で揺れ動く現実世界とサイバー空間のあり方を、より豊かなものに再構築することが大切だと考えている。

この連載は、愚問を發し読者諸兄姉の賢答をお願いする「愚問賢答」方式で進めようとしていきます(^o^)。サイバーリテラシーについては、折々に説明もしますが、詳しくはサイバーリテラシー研究所のウェブ (<http://www.cyber-literacy.com/ja/>) や拙著『サイバーリテラシー概論』(知泉書館、2007)を参照してください。

なお私のメールアドレスは、yano cyber-literacy.com です。

#### 注

(1)「送信済みメッセージを削除する iPhone 向けアプリ発表、米ベンチャー」(2010年2月27日、<http://www.afpbb.com/article/environment-science-it/it/2702726/5410610>)

(2) New York Times の以下の記事は、「サイバー空間は忘れない」ことをテーマに、それに対抗する、あるいはそれを緩和するためのさまざまな技術的、法律的な試みをレポートしたものとしてたいへん興味深い。(Jeffrey Rosen "The Web Means the End of Forgetting" Published: July 21, 2010)

## 連載 システムの肥大と人間の想像力

### 第3回 「あいまい領域」の構築

サイバーリテラシー研究所代表 (サイバー大学 IT 総合学部教授)

矢野 直明

横綱白鵬の連勝記録は63で止まった。双葉山の69連勝に届かなかったわけである。これを報じた日本経済新聞のスポーツ欄に、双葉山が70勝を達成できなかったときのエピソードが紹介されていた。

陽明学者の竹葉秀雄氏が気遣って電報を打った。「サクモヨシ チルモマタヨシ サクラバナ」。これに対する双葉山の返電が「ワレ イマダ モッケイニアラズ」だったが、記事によると、そのあと双葉山は竹葉氏に「サミシイデス スグオイデコウ」と打電したという(1)。

ここに心を打たれる。

偉丈夫がその大きな体に、深い悔恨とかすかな安堵感を背負って坐っている。通信手段が電報だったことは、自分と対話する十分な時間を与えたことだろう。ケータイと違うのはそのところである。

昔、「めぐり逢い」(1957年公開)というハリウッド映画があった。年配の方は懐かしく思い出さだろうが、ケーリー・グラントとデボラ・カーが競演したメロドラマである。豪華客船の甲板で出会った美男美女が一目で恋に落ちて、数か月後にマンハッタンのエンパイアステートビル屋上で会う約束をする。しかし、彼女は現れなかった。傷心の男は鬱々たる日々を過ごす。数年後にある劇場で知らずも観劇中の彼女に会う。性急に詰問する彼に、彼女は困惑しつつもよそよそしい態度をとる。やはり心変わりしてしまったのか。立ち去ろうとする彼は、そのとき、彼女が車椅子に乗っていることに気づく。

彼女は約束の日にビルの下まで来た。屋上では彼が待っているはずだと、それこそ上の空で道路を横断した彼女は、車にはねられ重傷を負う。恋人たる資格を失った彼女は、その後も彼に連絡しなかった。まったくの偶然が、2人を再びめぐり逢わせたわけである。

ケータイ時代にはこういう話は起こりようがない。だからいまメロドラマは生まれにくい。障害が大きければ大きいほど私たちの感情は高ぶるが、便利なツールがそのせつなく甘い、あるいは狂おしい絶望といった心的過程をカットしてしまう。「あっ、そういうことだったの」で終わりがちである。

今回の愚問は、現代IT社会は深いところで私たちの心のひだをなくしてしまうのではないか、ということである。それは心の「ため」がなくなるとも、倫理観の喪失とも言えるだろう。「サイバーリテラシー3原則」を補足すれば、サイバー空間はあいまい領域をなくしてしまう。

たとえば、村木厚子厚生労働省元局長が無罪になった郵便不正事件で、大阪地検特捜部の主任検事が証拠書類を改ざんしていたが、そのポイントはフロッピーディスクだと言えなくもない。

フロッピーディスクに入っていた偽の証明書の作成日時は2004年6月1日だったが、これは同年6月上旬に村木局長が上村係長に証明書を作成するように命じたという捜査の筋書きに合わなかった。そのため、検事は今年7月に日付を6月8日に書き換えた。

事件の見立てと証拠が食い違えば筋書きの方を再検討するのが当たり前なのに、逆に証拠の方を書き換えたわけである。押収した紙の書類のデータを、工作の痕をまったく残さずに書き換えるのは難しいが、電子メディアでは加工が自由自在で、しかも加工された痕跡もまたふつうには残らない。ここが味噌である。もう一つ、証拠として提出されないデータを書き換えて、ほどなくして被告側に返還したのも味噌といえれば味噌で、別ルートで紙の捜査報告書が法廷に提出されていなければ、彼の思惑通りに運んだかもしれない。

結論的に言えば、フロッピーディスクという電子メディアだったからこそ、検事は改ざんに安易に手を染めた可能性が強い。もちろんこういうことが電子メディア以前になかったという保証はないが、ここでは、証拠資料の扱いは慎重でなくてはいけない、事実を重んじなければいけないという捜査の鉄則、あるいは検察官の職業倫理が、フロッピーディスクという電子メディアによって薄められていく側面に注目したい。

同じころNHK記者が相撲協会への家宅搜索情報をケータイ・メールで当の相撲協会関係者に教えるという事件もあった。危うい情報を証拠が残るケータイ・メールで送るというのは理解に苦しむが、ケータイ・メールだからこそ安易に一線を越えた可能性もある。

手紙を書いてポストに投函するまでに時間がかかるという現実世界の制約は、途中で思い直すという行動の歯止めを生む可能性があるし、電話で話したり、直接会ったりしようとするれば、やはり通報を躊躇するかもしれない（躊躇しないかもしれないけれど（^^））。

子どもが本屋の店頭でアダルト本を見ようとしても、店主や周囲の目が気になって、見ようとして見られないわけではないけれど、どうも見づらい。だから見ないことで、一定の社会秩序（倫理）が保たれる。ウェブ上ではそういうしがらみがない。アダルトサイトには、18歳以上と以下を選択する段階を設けているものが多いが、ただのクリック1回の差である。これでアダルトサイトから未成年者を排除する歯止めをかけることは難しい。

IT社会においては、心の「ため」とでもいうべきしなやかさが失われがちである。こう言うと、細かいことを気にしすぎるとか、便利なツールを使うことを規制すべきで

ないという反論が出るだろうし、一方では、法による取り締まりを強化すべきだという意見もあるだろう。子どもたち(デジタルネイティブ)には新しい感性が育ちつつあるのだと達観する見方もあろう。しかし、便利だが暴走もする「技術」と、強制力はあるが対策としては後手に回りがちな「法」の間に、個人一人ひとりの自律的な「倫理」の領域を確保することがいよいよ重要ではないだろうか。

『サイバーリテラシー概論』の冒頭に掲げた応用倫理学の先駆、加藤尚武の以下の文章は、サイバー空間に「あいまい領域」を創造する重要性を指摘していると思われる。「素朴な自然主義への復帰はもう不可能である。人間は自分で自然を設計し直さなくてはならない。人工的に反人工的な自然を保持しなくてはならない。本当の自然らしさを設計しなくてはならない。この逆説に耐えて実践的に切り抜けることが、科学/技術のゆくえにまつ人間の責務である」

#### 注

(1) この記述はウェブの記事にもある (<http://cherrychan.exblog.jp/12281028/>)。双葉山に木鶏の故事を最初に伝えたのは安岡正篤で、打電も安岡宛であるとの説もある。また、私が記憶していたのは「我いまだ木鶏たりえず」という文章で、ここでの電文とは少し違うが、この辺は詳らかにしない。

(2) 加藤尚武 『価値観と科学/技術』(岩波書店、2001)。

この連載は、愚問を発し読者諸兄姉の賢答をお願いする「愚問賢答」方式で進めています。賢答をお待ちします(^o^)。なお、コラムへの感想を1通いただきました。ありがとうございました。サイバーリテラシーについては、折々に説明もしますが、詳しくはサイバーリテラシー研究所のウェブ (<http://www.cyber-literacy.com/ja/>) や拙著『サイバーリテラシー概論』(知泉書館、2007)を参照してください。

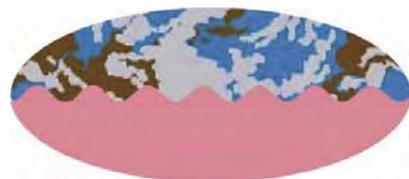
なお私のメールアドレスは、yano cyber-literacy.com です。

連載 システムの肥大と人間の想像力  
第4回 Googleの野望にどう対応するのか

サイバーリテラシー研究所代表 (サイバー大学 IT 総合学部教授)  
矢野 直明

皆さん、新年おめでとうございます。

今年の年賀状に以下の図を添えてみた。



サイバーリテラシーの観点から見た、サイバー空間と現実世界の関係史の第4段階の図で、現実世界(上)がサイバー空間(下)の上にそっくり乗った、現代IT社会の姿を示している。サイバーリテラシー研究所のウェブに第1段階から3段階に至る図が表示してあるが(1)、第1段階に比べると、現実世界とサイバー空間の位置関係が逆転しているところが肝心なところである。

これまで支配的だったり、合理的だったりした既存の社会秩序が、サイバー空間(インターネット)によって激しく揺れ動いている。そして、このサイバー空間の情報をすべて握ろうというのがGoogleの野望である。「Googleの使命は、世界中の情報を整理し、世界中の人々がアクセスできて使えるようにすることです(Google's mission is to organize the world's information and make it universally accessible and useful.)」と明言している通りである。

サイバー空間の情報をGoogleがすべてデータベース化し、世界中の人びとに提供しようとしており、ここには、広汎な知の体系を打ち立てたいという「ヨーロッパの知的伝統」が反映されていよう。まだ創業以来十数年という一企業の試みの気宇壮大さと、恐るべき実行力に驚嘆することはあっても、正面からけしからんと反対する声はほとんどない。

もっともGoogleの書籍検索サービスに対して、最初に大がかりな危惧の声を上げたのはフランスだった。Google仕様の全情報のデジタル化に反対したわけで、ここにもヨーロッパの知的伝統が反映されている。

日本でも、Googleの動きに警戒を強める声がある。『Google問題の本質』(岩波書店、2010)を書いた弁護士の牧野二郎は、Googleなどの各検索サイトが独自に情報を集め、個別にデータベース化しているのは壮大な無駄である、各検索サービスは独自の基準で情報を編集しており、しかもその基準を公開していないから、彼らが提供する情報は、サイバー空間全体の情報の公正な反映ではなく、それぞれのバイアスがかかっている、と現在の検索システムのあり方を批判した。

さらに、各検索エンジンが独自に、しかも部分的に情報を収集する必要はもはやない。膨大でしかも日々増殖しているサイバー空間そのものを一つのデータベースと考えるべきである、その上で、これらのデータを公正な基準でインデックス化すべきである、と具体的な提案もしている。

サイバー空間を、グーグルなどの検索サービスによって秩序づけられるのではなく、サイバー空間全体の姿をそのままにして、各種のインデックス作成を行えばいいというのが彼の構想である。言わば、データベースとインデックスの分離提案で、サイバー空間そのものを公共財(コモンズ)として、有効に利用する、より公正な方法を人類全体で考えようということである。

きわめてまっとうな主張である。しかし、それを実現する具体的な手立てがあるのかと考えると、すっかり意気消沈して、もはや国にも企業にも手に負えないから、先鞭をつけたグーグルにまかせるしかない、グーグルはその理念を見てもそれほどひどいことはしないだろうという諦観、あるいは楽観が先に立つ。これが、あるいは「Google問題の本質」ではないだろうか。

「サイバー空間の再構築と現実世界の復権」を唱えている身としても、なかなか悩ましいところである。その悩みの先に「愚問」が芽生える。

たとえば、グーグルがストリートビューや書籍検索サービスで主張しているオプトアウトという事後承諾方式である。グーグルは「あなたの情報をデジタル化したいのですが、ご承知いただけますか」と最初に了解を求めるようなことはしない。「われわれは、創業以来の使命として、膨大なエネルギーと資金を投入して、情報をデジタル化する作業に着手した。しかし、その試みに異議のある人は申し出てくれれば、デジタル化から除外してもいい」と言う。

このオプトアウト方式は、自ら公開したウェブの情報に対してや、いわゆる無方式主義の著作権制度のために孤児著作物(死亡などで権利者が誰か分からず、利用されずに放置されている著作物)が多数存在するような場合には、ある程度説得力があるが、ストリートビューなど、きわめて強引な側面を見せつける。人に見られて恥ずかしい画像を撮られて公開されても気づかない人もいるし、事後で気づいて削除を申し入れても手遅れの場合が多い。「サイバー空間は忘れない」からである。

情報のデジタル化作業に対して、かくも切れ味鋭い方式を考えだした、あるいはその適用を決断した知恵者は誰なのか。これがアメリカン・スタンダードだとしても、これをグローバル・スタンダードにまで拡大していいのか。サイバー空間のデザインが一企業、あるいは強大ないくつかの企業に任せっきりの現状をよくよく考えるべきではないのか、というのが第一の愚問である。

それより何より、現在のわれわれは、あまりに情報のデジタル化(サイバー空間の開発)に目が行き過ぎて、情報のもっと深い意味を忘れてしまっているのではないか。情

報のデジタル化は歓迎する。それをグーグルが先導しているのもいい。しかし、世界全体が情報のデジタル化に著しく傾斜している風潮には歯止めが必要ではないのだろうか。

冒頭の図に戻って言えば、現実世界はすべてがサイバー空間に左右されるほどやわなものではないはずである。例えばの話、「人は心を通してのみ、はっきりとものが見える。かけがえのないものは目には見えない (One sees clearly only with the heart. Anything essential is invisible to the eyes)」と「星の王子さま」(2)に教えたキツネに学ぶべきではないのだろうか。これが第二の愚問である。

<注1> <http://www.cyber-literacy.com/ja/about/index.html> 参照。

<注2> Antoine de Saint-Exupery "Le Petit Prince"(Richard Howardの英訳 "The Little Prince"から)

この連載は、愚問を発し読者諸兄姉の賢答をお願いする「愚問賢答」方式で進めています。賢答をお待ちします(^o^)。サイバーリテラシーについては、折々に説明もしますが、詳しくはサイバーリテラシー研究所のウェブ

(<http://www.cyber-literacy.com/ja/>)や拙著『サイバーリテラシー概論』(知泉書館、2007)を参照してください。

なお私のメールアドレスは、[yano@cyber-literacy.com](mailto:yano@cyber-literacy.com)です。

連載 システムの肥大と人間の想像力  
第5回 東北関東大震災と innocent fraud

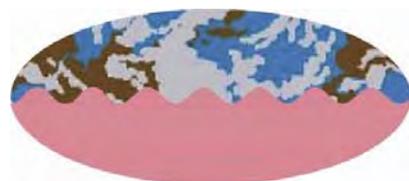
サイバーリテラシー研究所代表 (サイバー大学 IT 総合学部教授)  
矢野 直明

今回の地震および津波で亡くなられた方々のご冥福をお祈りします。同時に、被災したすべての方に心からお見舞い申し上げます。

地震が起こったのは 2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分だが、私はそのときイタリアから帰国する飛行機で成田上空にさしかかっていた。日本を大きな地震が襲ったらしいとの機内アナウンスがあったが、地上管制塔との交信も途絶えがちで、飛行機はしばらく上空を旋回したあと、早々と函館に着陸した。給油後に成田か羽田に戻る予定だったが、両空港への許可は下りず、結局その日は函館泊。翌午後 1 時すぎ同じ飛行機で成田に向かい、午後 3 時に到着。開通し始めた総武線快速で東京まで出て、東京からこれも開通したばかりの東海道線に乗って大船に着いた。迎えに来てくれた娘の車で自宅に戻った。

マグネチュード 9.0 の地震、ついで襲った大津波。戦後最大規模の自然災害に、人災とも言うべき東京電力福島第一原子力発電所の重大事故が重なった。これは日本人に突きつけられたまさに戦後最大の試練とっていいだろう。

前回、サイバー空間の上にすっぽり乗かってしまった現実世界の図を示したけれど、



地震はこの図を稲妻のように切り裂き、現実世界の土台が崩れ、同時にサイバー空間もまた大きく揺らいた。この図をもう一度考えてみたい。

東京電力の原発事故は 3 月 23 日現在、なお危機的状況を脱していないようだが、世界各国の発電量における原発依存率を電気事業連合会「原子力・エネルギー図面集 2010」で見ると、以下のようなものである (1)。

- フランス 77.1%
- 韓国 34.0%
- 日本 24.0%
- ドイツ 23.5%
- アメリカ 19.3%
- ロシア 15.7%

イギリス 13.6%

中国 2.0%

一方、日本が世界有数の地震国であることも間違いない。面積の大きさや地震規模のとり方などで数字は変動するが、ここでは本川裕「社会実情データ図録」が日本の面積（37万平方キロ）当たりで計算した世界各国の地震頻度（マグニチュード 5.5 以上、回/年、1980年～2000年平均）の数字を上げておこう。

中国 2.10

インドネシア 1.62

イラン 1.43

日本 1.14

アフガニスタン 0.81

トルコ・メキシコ 0.76

と続く。以下アトランダムに、アメリカ 0.48、ロシア 0.29、ドイツ 0.05 などとなっている。フランスは表に出ていない。地震がほとんどないということである。

二つの数字から明らかなのは、地震国でかつ原発推進国である日本の突出ぶりである。地震が多いから原発はやめようと考えずに、地震国ではあるが原発も必要、と唯一の被爆国でありながら原発を推進してきた日本に、どれだけの覚悟があったのだろうか。

アメリカの経済学者、ジョン・ガルブレイスは 2004 年に“ The Economics of Innocent Fraud ”（邦訳『悪意なき欺瞞』）（3）という本を書き、「経済学界や政治学界においては、個人または集団が手にする金銭的利益が現実を見えにくくするという傾きが、他の学問分野に比べてはるかに顕著である（序）」として、なぜそうなのかを考察した。

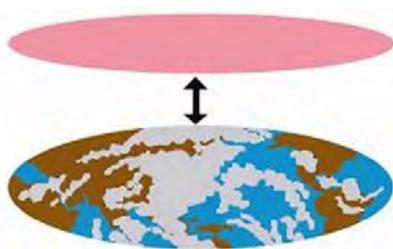
この innocent fraud という表現をどう解すべきなのか。innocent は「悪意なき」、「無邪気な」ということではあるだろうが、ガルブレイスが言及している事例を見ると、もっと皮肉に「臆面もなき」、「あっけらかんとした」、「無邪気を装った」、「無知を決め込んだ」、「より悪質な」、「強欲な」と言えなくもない。だからガルブレイスの優しさとはずれるけれど、unconscious fraud と言った方がいいようにも思う。原発推進に猛進した日本政府、電力関係者ばかりではなく、私たち国民全体について言っているのである。

これは情報セキュリティ大学院大学学長の林紘一郎さんに聞いた話だが、彼が日本経済新聞紙上でひとひねりしたグーグル擁護論を書いたとき、名和小太郎さんが「あなたもグーグルを innocent fraud と考えているのか」とメールをくれたそうである（私には、グーグルが innocent だったとしても、その到達しつつある状況から考えると、ただ unconscious だっただけではないかと思われる）。

名和さんは innocent fraud を「悪意なき嘘」と訳して、自著のサブタイトルに用いた（4）。彼はこの本で、情報技術や通信技術が発達している条件として以下の三つを上げている。「その第一は、最初から未来を予見できるようにはしないということ、つ

まり、問題をすべて部分最適の発想で解決してしまう。その第二は、部分最適以上のことはできないように、社会の動きを加速してしまう。その第三は、社会の動きを加速するために、つねにリスクが充ちているような構造に社会を仕向けてしまう（まえがき）。

もちろん原発技術と IT を同列に論ずるのは乱暴ではあるが、技術を使う人間の知恵ということをもう一度考えるべき時だと思われる。サイバーリテラシーに引き戻して言えば、結局のところ、サイバー空間と現実世界の関係を第一段階に回帰させるべきだということではないだろうか。これは「現実世界の復権」ということでもある。



<注>

(1) 主要国の電源別発電電力量の構成比（「原子力・エネルギー」図面集 2011）。世界全体では、石炭 40.9%、天然ガス 21.3%、水力 15.9%、原子力 13.5%、石油 5.5% などとなっている。

[http://www.fepc.or.jp/present/jigyoushuyoukoku/sw\\_index\\_03/index.html](http://www.fepc.or.jp/present/jigyoushuyoukoku/sw_index_03/index.html)

(2) <http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/4380.html>

(3) ジョン・K・ガルブレイス『悪意なき欺瞞』（佐和隆光訳、ダイヤモンド社、2004年、原著“The Economics of Innocent Fraud”2004）

(4) 名和小太郎『イノベーション 悪意なき嘘』（岩波書店、2007年）

この連載は、愚問を發し読者諸兄姉の賢答をお願いする「愚問賢答」方式で進めています。賢答をお待ちします(^o^)。もっとも、今回は愚問を自肅しました、かな(^o^)。サイバーリテラシーについては、折々に説明もしますが、詳しくはサイバーリテラシー研究所のウェブ（<http://www.cyber-literacy.com/ja/>）や拙著『サイバーリテラシー概論』（知泉書館、2007）を参照してください。

なお私のメールアドレスは、yano@cyber-literacy.comです。

## 連載 システムの肥大と人間の想像力

### 第6回 個人の生き方がそのままシステムにはね返る

サイバーリテラシー研究所代表 (サイバー大学 IT 総合学部教授)

矢野 直明

今回の東京電力福島第一原子力発電所の事故であらためて痛感したのは、原発に賛成するにしろ反対するにしろ、事故が起これば平等に放射能(放射線)が降ってくる、ということだった。国土の狭い日本にいつの間にか54基もの原発ができていた事実には無知、あるいは無関心だったことへの反省もあった。前回、アメリカの経済学者、ジョン・ガルブレイスの innocent fraud(悪意なき欺瞞)という言葉を利用して表現したかったのはそのことだが、同じような思いを抱いた人は多かったようだ。

朝日新聞5月17日付朝刊の「時事小言」というコラムで、国際政治学者の藤原帰一は「コンスピラシー・オブ・サイレンス、暗黙の陰謀という英語表現がある。目前の状況から目を背け、不正の横行や危険の拡大を見逃してしまう。原発事故を前にして感じたのは、それだった。原子力発電の危険性から目を背けてきたという、砂を噛むような思いである」と書いている。

広島、長崎への原爆投下で幕が開いた戦後日本は、というより、戦後の世界史は、一方で原爆実験、水爆実験、核軍縮、反核といった兵器(軍事技術)としての核をめぐる動き、他方における原子力の平和利用、“夢のエネルギー”としての原発開発で彩られてきた。

実際、事故前の昨年6月に改定されたエネルギー基本計画では、2030年までに原発14基以上を増設、発電量の50%を原発でまかなうとされ、同時にそのことで二酸化炭素排出量の大幅削減をめざす地球温暖化対策の切り札ともしていたのである。

原発に反対する運動や事故の危険性を警告する声もちろんあったが、潤沢な交付金や優遇税制、補助金事業、安定した就職口、大がかりなキャンペーンなどを用意した国をあげての原発推進策のもとに、過疎地復興をかけた道路、新幹線、公共工事並みの誘致合戦が恒常化し、原発の危険性への一般の関心はきわめて低かった、あるいはしだいに薄れていった。今回の地震・津波による事故で「安全神話」は崩れたが、それ以上に、これまでの原発推進計画のありよう、というより瑕疵が明るみに出たと言えよう。

東日本大震災を二つの歴史的文脈において考えてみよう。

明治維新 敗戦 東日本大震災

関東大震災 阪神淡路大震災 東日本大震災

念頭にあるのは、は「外圧」をきっかけとする世代交代、構造改革であり、は危機における人びとの生き方、国土の再生である。それはゼロからの出発だと思われる(ここでは話を原発に限る)。

事故を引き起こした東京電力の責任をどう追及するのか。そもそも現在の電力需給システムはこのままでいいのか。再生エネルギーを安定的に供給する技術開発はほんとうに不可能なのか。そういったことを国民一人ひとりが改めて考え直すことを問われている。

日本における原発推進の意思決定システム、利権としての原発論議、反対するものを排除していく（押しつぶしていく）仕組み、また反対はしたが、あるいは反対だからこそ原発の具体的な安全論議に踏み込めなかった反対陣営、ゼロから出発するということは、こういった社会構造の改変に切り込んでいくことである。

河野太郎衆議院議員が動画サイトで語っていたが（1）、自民党関係のエネルギー調査会などでの原発論議はもっぱら誘致に重点が置かれ（原発立地地区の議員だけが集まっていた）、安全論議などはほとんど行われず、原理原則的な意見を述べると、「仲間でやっていることにそんな（かたい）ことを言うな」、「将来ある身なんだから（言動は）慎重にするように」、「異論はあるだろうが委員長預かりということにしよう（結局は賛成可決）」などとまともに取り上げられなかったらしい。拳句の果ては「原発に反対する河野は共産党」などと攻撃されたという。「議論するのではなく、あらかじめ陣営に所属したうえでの誹謗中傷合戦」だった。

そういう意味では、震災後ほどなく自民党の推進派議員たちが、かつて原発旗振り役だった東電副社長の経歴をもつ元参院議員を参与に据えて、「エネルギー政策合同会議」を発足させたとのニュースには驚かされた。いますべきことは未曾有の事故を引き起こしたことへの反省であるべきで、あらためて原発推進を掲げるにしろ、これまでの推進議員はむしろ引退すべきではないだろうか。米倉弘昌経団連会長が米誌のインタビューに答えて「（東電が）甘かったということは絶対はない。要するにあれば国の安全基準というのがあって、それに基づき設計されているはずだ。恐らく、それよりも何十倍の安全ファクターを入れてやっている。東電は全然、甘くはない」（2）などと語っているのも耳を疑う。

「リスク社会」とか「再帰的社会」とか言われる現在、たとえば地球温暖化によるオゾン層の破壊は世界規模で広がるリスクだけれど、それが果たしてどれほどのリスクなのか明確に認識することは難しい。二酸化炭素排出をどれだけ削減したら安全なのかも実はわからない。だがリスクを避けるために、私たちは国を超えて行動せざるを得ない。前に進むしかない、ということである。一人ひとりの小さな行為がそのままシステムにはね返る。「北京で今日蝶が羽を動かして空気をそよがせると、来月ニューヨークで嵐が生じる」とも言われるバタフライ効果である。

私たちが享受してきたオール電化の快適生活が原発によって支えられてきたのは間違いない。原発中心のエネルギー政策の転換は私たちの生活改造と不可分である。一方で、一人ひとりが巨大システムに対して物申すべきでもあろう。マスメディアに代わって情報インフラの主流になりつつあるツイッター、フェイスブックといったソーシャル

メディアはそのためにも役立つだろうと、「愚問」を発することも忘れて、考えている今日このごろである。

<注>

(1) マル激トーク・オン・ダイヤモンド (<http://www.videonews.com/on-demand/>、第524回、2011年4月30日)

(2) 日本経団連会長、率直発言 (1月22日)

<http://search.jp.wsj.com/search?q=%E7%B1%B3%E5%80%89%E5%BC%98%E6%98%8C>

サイバーリテラシーについては、折々に説明もしますが、詳しくはサイバーリテラシー研究所のウェブ (<http://www.cyber-literacy.com/ja/>) や拙著『サイバーリテラシー概論』(知泉書館、2007)を参照してください。「リスク社会」や「再帰的社会」については、『情報文化論ノート』(同、2010)でふれました。

なお私のメールアドレスは、[zano@cyber-literacy.com](mailto:zano@cyber-literacy.com)です。

## 連載 システムの肥大と人間の想像力

### 第7回 サイバー空間と現実世界の関係が再逆転

サイバーリテラシー研究所代表（サイバー大学 IT 総合学部教授）

矢野 直明

現代社会を、私たちが現に生活している「現実世界（リアルワールド）」と、インターネット上に成立した「サイバー空間（サイバーワールド、サイバースペース）」の相互交流する姿と捉えることで、これからの社会を快適で豊かなものにするための実践的知恵を導き出そうというサイバーリテラシーの課題は以下の3つである。

デジタル技術でつくられたサイバー空間の特質を理解する

②現実世界がサイバー空間との接触を通じてどのように変容しているかを探る

③サイバー空間の再構築と現実世界の復権

そのうえで、サイバー空間のアーキテクチャーとして「サイバーリテラシー3原則」を定め、サイバー空間と現実世界の関係を歴史的経過として、同時に、現実のIT社会のいくつかの断面（種類）として考察してきた。

2011年になって、とくに日本においては東日本大震災をきっかけに躍進しつつある「ソーシャルメディア」は、サイバーリテラシーにとって興味深い現象を引き起こしている。

ソーシャルメディアというのは、一般にブログ、ツイッター、フェイスブック、ミクシィ、ユーチューブ、ニコニコ動画、ウィキペディア、ウィキリークスなど多種多様な電子メディア（オンラインメディア）群である。それはWeb2.0で輩出したUGC（User Generated Content）であり、CGM（Consumer Generated Media）であり、日本風には「消費者生成メディア」である。

私はまた、マスメディアとパーソナルメディアが錯綜する現下のメディア状況を「総メディア社会」と呼んできた。ソーシャルメディアはパーソナルメディアの発展したもので、とくにツイッターとフェイスブックは、マスメディアをも包含した総メディア社会全体の基幹インフラの位置を占めるようになっている。

ソーシャルメディアについては、雑誌『広報』に掲載しているので（一部はブログで公開）、そちらも参照していただきたいが、ソーシャルメディアの発達はサイバー空間のあり方をまた大きく変えつつある。そのいくつかを箇条書きにしてみよう。

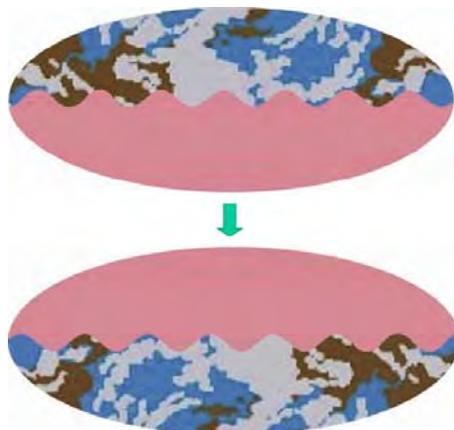
東日本大震災では、ツイッターなどで流れる雑多な情報を、多くの人がリツイートして拡散したり、まとめサイトをつくって一覧できるようにしたりした。そこでは、インターネット上の情報を仲介するソーシャル・ハブ、インフルエンサー、キュレーターと呼ばれる人びとの役割が注目された。

流言やデマなど意図的な、あるいは意図せざる誤情報も流れたが、それらは他の人にチェックされて修正されたり、デマ情報としてまとめられたりした。次々に新しい情報が提供される事情もあり、大震災時としては、かつての関東大震災のような悲惨な事件事故が発生することはなかった。マスメディアの情報は内部で何重ものチェックを受け、それなりに真偽が確かめられているが、パーソナルメディアにおいてそのようなチェックは働かない。そういう意味で、マスメディアは「編集メディア」、パーソナルメディアは「無編集メディア」と言えるが、その延長で、ソーシャルメディアは「相互編集メディア」と呼んでもいい。サイバー空間全体でみると、情報はそれなりの道筋をつけられたのである。また、マスメディアとソーシャルメディアの相互補完的な活動も多く見られた。

③従来、とくに日本人の場合、インターネット上の発言は匿名、あるいはハンドル名によることが多く、実名による情報発信はIT関係者、学者、ジャーナリスト、起業家、政治家といった、実名発信に意味を求められる一部の専門家を別にすると、決して多くはなかった。匿名発信か実名発信かは、インターネット普及以来、時に応じて、あるいはそれをめぐる事件が起こるたびに議論されてきたが、ここへきて、発言に対する責任のとり方といった文脈ではなく、サイバー空間においても実名を使った方が自然だし、実際に便利である、といった風潮が出てきた。実名主義のSNSとして全世界に6億人ものユーザーを獲得したフェイスブックの存在はたいへん興味深い。

これらの事実から私が言いたいのは、サイバー空間に生身の人間が浮上してきたということである。実名発信だからこそ、これまでの情報発信の実績や現実世界における知名度から、この人の発言は信頼できると判断され、発言への影響度も高まった。サイバーリテラシーの課題の第3、「サイバー空間の再構築と現実世界の復権」という事態がいよいよ現実のものになりつつある、というのが私の予感である。

サイバー空間と現実世界の関係図をさらに発展させれば、こうなる。



現実世界の上にサイバー空間が張り付いているけれど、そこには現実世界のコントロールが効いている。あるいはきかせる可能性が大いに出てきたということである。サイバー空間の上に乗っかって、すべてをサイバー空間によって規定される現実世界から、現実世界がサイバー空間を有効に活用する時代への再逆転とも言えよう（だからこの図は関係史の初期の状態とよく似ている）。

第4回で取り上げたグーグルの野望は「世界中の情報を整理し、世界中の人々がアクセスできて使えるようにすること」であり、コンピュータの力技による検索こそが命だった。サイバー空間のアルゴリズムでデジタル情報を徹底的に管理する傾向が強かったわけである。これに対してフェイスブックは生身の人間のコミュニケーションを重視している。

だから、グーグルからフェイスブックへの移行は、フェイスブックだけの話ではなく、ソーシャルメディア全体の新たな可能性を示すものではないのか、というのが、いささか楽観的にすぎるかもしれない、今回の愚問である。

この連載は、愚問を發し読者諸兄姉の賢答をお願いする「愚問賢答」方式で進めようとしています（^o^）。サイバーリテラシーについては、折々に説明もしますが、詳しくはサイバーリテラシー研究所のウェブ（<http://www.cyber-literacy.com/ja/>）や拙著『サイバーリテラシー概論』（知泉書館、2007）を参照してください。

なお私のメールアドレスは、[yano@cyber-literacy.com](mailto:yano@cyber-literacy.com)です。

## 連載 システムの肥大と人間の想像力

### 第8回 「情報倫理」という考え方

サイバーリテラシー研究所代表 (サイバー大学 IT 総合学部教授)  
矢野 直明

現代における「システムの肥大と人間の想像力」について、いくつかの「愚問」を發してきた。皆さんからはほとんど「返答」を得られなかったけれども(^o^)、私自身、コラムを書きながら、あるいは少しは賢くなったかもしれないと思っている。これぞ愚問賢答、自画自賛!!

さて私自身の大いなる関心事である「情報倫理」について、今回とあと1回、コラムを続けさせていただきたい。

かっこうの素材はツイッターである。2011年になってからでも、ツイッターの安易なつぶやきで他人のプライバシーがまき散らされ、そのことでメッセージを書いた当の本人も社会的制裁を受けるという、愚かともいたましいとも言える事件が相次いだ。

まず1月、都内のホテルのレストランでアルバイトをしていた女子大生が、来店した有名人の男女の名前やその行動をツイッターに書き込んだ。これがネット上で非難され、店名は特定され、女子大生の名前など個人情報も明かされた。ホテルは2人に謝罪し、女子大生は店をやめる結果になっている。

次に5月、スポーツ用品大手銀座店の20歳代の女性社員が、訪れた客のJリーグ選手とその夫人を見かけ、ツイッターで2人を中傷するような書き込みをした。これがやはりネット上で話題になり、店はサイト上に「同選手、ご家族をはじめ関係者の皆様およびお客様に多大なるご迷惑とご心配をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます」との謝罪文を掲載した。女性社員は4月に新卒で採用されたが、実名も割り出されてしまい、まもなく退社した。わずか140文字のメッセージで就職したばかりの会社を棒にふったわけである。

そして7月、ワールドカップで優勝した女子サッカー、なでしこジャパンのK選手が飲み会で発言した内容を、参加していた大学生がツイッターで中継した。K選手はなでしこジャパンや監督の裏話もしていたらしく、学生らが金メダルをかじっている写真も紹介された。これが騒ぎになったため、K選手は釈明とおわびの会見をしたが、この事件に関して学生の通う大学が「Kさんをはじめ関係方面にご迷惑をかけたことを、大学として深くお詫び申し上げます」と陳謝した。

いろいろ考えさせられる話である。

まず若者たちはなぜ身近で起こっている出来事を何の考えもなく公共の場に引き出してしまおうのか。どう考えても、彼らには周りの私的空間とインターネットでつながる

公共空間との区別がない。両者がストレートにつながっている。これらの話題が井戸端会議（これまた古いたとえだが、サイバーリテラシー的に言えば現実世界）でしゃべられている分には、伝わる範囲も限られているし、しゃべった内容はすぐ忘れられる。これに対してサイバー空間は「制約もない」し、「忘れる」こともない。

これまでの重層的な社会構造を簡単につき破ってしまう新しい道具に対する警戒も、使い方への配慮もほとんどない。というか、そういうことへのリテラシー教育を受けていない。

便利な道具（技術）は諸刃の剣である。婦女暴行などの犯行現場にさしかかった人がツイッターで多くの人に救いを求めるのであれば、それは美談ともなろう。ツイッターはどのように使い、どのような場合は使うべきではないのか。IT 社会に対するリテラシーがあれば、他人と同時に自分自身をも滅ぼすような危険なツールを持ち歩いていることへの覚悟も生まれよう。このサイバーリテラシーに基づいた倫理を私は「情報倫理」と呼んでいる。

大岡昇平は南洋諸島の悲惨な戦争体験をもとに小説「野火」を書いた。以下はその中の有名なシーンである。主人公が狂い死にした将校の腕の肉を右手に持った剣でえぐりとろうとしたとき、「変なことが起こった。剣を持った私の右の手首を、左の手が握ったのである」。「『汝の右手のなすことを、左手をして知らしむる勿れ』。……。『起てよ、いざ起て……』と声は歌った。私は起ちあがった。これが私が他者により、動かされ出した初めである」。

主人公は戦争という極限状況の中で、すでに若いフィリピン人女性を銃で殺している。手榴弾を受けてそげた自分の肩の肉も食べた。しかし、同僚が同僚を殺してその肉を食べている間、激しい嘔吐に悩まされ、最後にその同僚を殺した。

一方は死と直面した状況下の銃剣、他方は平穏な時代におけるケータイ（スマートフォン）。比べるにはあまりに次元が違うとも言えるけれど、IT 社会には IT 社会で、情報のデジタル化が引き起こす問題に有効に対応するための倫理が必要である。それは、伝統的倫理から抜け落ちている「指針の空白」を埋めるものとも言えよう。

その課題は、IT 技術がもたらす事態に対応する新しい生き方を考える。IT 技術が古い倫理を突き崩しつつある実態を分析し、効果的に対応する方策を考える。サイバー空間の新たな構築、である。これはサイバーリテラシーの課題とも照合している。

アスキー総合研究所の調査（2009 年暮れ実施だからちょっと古い）によると、ツイッターのユーザーは 20 代がもっとも多く、ついで 30 代と 40 代が続く。調査では、「つぶやき」の対象として、「特定のユーザーに向けてはいないが、誰かの反応を期待して」、「誰に聞いてもらうつもりもなく、純粹に独り言として」、「リアルでは面識はないが、

SNS やブログ、ツイッター上で知り合った人へ」などと答えた人が多かったという。ここには、漠然とした対象に向けて他愛ないおしゃべりをする若者たちの心象風景が投影されている。それがどういう行為で、どのような結果を招くかということへの想像力はほとんどない。

ファイル交換ソフトのナップスター、画像配信のユーチューブ、ニコニコ動画、SNS のフェイスブック、ミクシィなど、インターネットを使った新しいサービスが次々登場し、しかもあっという間に世界中に普及、そのたびにサイバー空間と現実世界の交流のあり方を変えている。ツイッターの画期的な点は、サイバー空間と現実世界の交流のリアルタイム性にある。その「なんとなくのつぶやき」が他人のプライバシーを侵害したり、名誉を棄損したりといった結果を招いている。

本人も意識しないままに、他人に危害を加えてしまうような事態をどう防げるか。右の親指がボタンを押しそうになったとき、左手がそれを止めることができるためには、どうすればいいのかを、真剣に考えるべきではないだろうか。

先に上げた3つの事例でメッセージを発信した若者たちは、いずれもその後は無言である。謝罪したのはホテルであり、スポーツ店であり、発言を報じられたサッカー選手であり、学生が在籍していた大学だった。当事者たちは社会的制裁を受けたとも言えるが、反省しているのかどうかは、はっきりしない。私としては、二度と同じ過ちを繰り返さないためにこういう工夫をした、といった反省の弁を聞きたい。

何よりも経験から学ぶことが大切である。情報倫理では、このようなケースバイケースの小さな教訓を社会的合意として積み重ねたいと思っている。しかし、いま一つ人口に膾炙しないのは、これも愚問だからかな(^o^)

この連載は、愚問を發し読者諸兄姉の賢答をお願いする「愚問賢答」方式で進めてきました(^o^)。サイバーリテラシーについては、折々に説明もしますが、詳しくはサイバーリテラシー研究所のウェブ(<http://www.cyber-literacy.com/ja/>)や拙著『サイバーリテラシー概論』(知泉書館、2007)を参照してください。

なお私のメールアドレスは、yano cyber-literacy.com です。フェイスブックでもお会いできます。

連載 システムの肥大と人間の想像力

第9回 「世界観」と「処世訓」

サイバーリテラシー研究所代表 (サイバー大学 IT 総合学部教授)

矢野 直明

長い間、「大人の道具」と「子どものおもちゃ」は別物で、子どものおもちゃは大人の道具の模造品だった。女の子のままごと、男の子のちゃんばらごっこ、みなそうで、子どもは大人の社会に入っていく訓練として、いわばそれらの遊びをしていたと言えるが、最近になって、「大人の道具」と「子どものおもちゃ」の境界は渾然としてきた。

私の記憶によれば、

<1> ビジネスツールのポケベルを、女子高生などが数字を言葉に読み替えてコミュニケーションツールとして使うようになった。

<2> ファミコンは子ども用のおもちゃとして売り出されたが、大人もけっこうおもしろがって遊んだ。

<3> 大がかりなアーケードゲームと、たとえば日航のフライトシミュレーターがよく似たものになってきた。

などの現象があった。

コンピュータ技術の発達がそれを使った機器の高機能化、小型化、低価格化を促し、従来にないやり方で世の中を変えた結果、大人の道具と子どものおもちゃの垣根も取り払われた。ケータイになって大人の道具 = 子どものおもちゃになった、と言うよりすべての道具が万人共通のものになった。その完成形がスマートフォンと言えるかもしれない。大人が使う場合と、子どもの場合は、ソフトウェア的に機能が異なることがあっても、機器そのものはほとんど同じで、操作はほとんどボタン一つ。操作ということでは、子どもの習熟度の方が高い。

大人と子どもの世界の境界がぼやけたということでもあるだろう。だからこそ、これまでの大人から子どもへの伝統や知識の伝達が、デジタルネイティブ(子ども)からデジタルイミгранト(大人)へといったかたちで、一部では完全に逆流してしまう。

大人の社会においても、技術の民生用と軍事用といったジャンルによる区別はなくなり、ヒエラルキー構造は崩れ、ネットワークの威力が増すなど、既存秩序そのものが大きく変容している。

連載中にふれたけれど、「社会の包摂性」とか「再帰的社会」、あるいは「リスク社会」といった現代社会の傾向が、ITによって急激に、しかも広範囲に促進されていることは明らかである。リスク社会の恐ろしさを、私たちは3.11大震災による福島第一原子力発電所の事故によって強烈に思い知らされた。

現代IT社会においては、「個」と「社会」の関係もきわめて硬直化している。社会学

者、宮台真司の表現を借りれば、<システム>の全域化によって<生活世界>が空洞化している。「個人は全くの剥き出しで<システム>に晒される」ようになり、『善意&自発性』優位のコミュニケーション領域から『役割&マニュアル』優位のコミュニケーション領域へと押し出されている(1)。

2008年の秋葉原大量殺傷事件の際よく言われたように、かつては不況になれば帰るべき田舎(故郷)や家があったが、現代の農家はすでに余計な人間を包み込む能力をなくしているし、両親が離婚して帰るべき家がない若者も多い。原発事故では、多くの人が故郷そのものを失った。原発に賛成してきたにしろ、反対してきたにしろ、事故が起これば平等に放射能にさらされるのである。

リバタリアニズム(自由至上主義)か、コミュニタリアニズム(共同体主義)かといった論争が一時さかんだったが、現代IT社会においては、個人の生き方がそのままシステムに跳ね返るから、個人の生き方と社会の秩序はすでに不可分に結びついている。

大袈裟に言えば、サイバーリテラシーは、現代IT社会の構造を明らかにしようとする一つの「世界観」である。「サイバーリテラシー3原則」や「総メディア社会」はその見取り図であり、以前に紹介した「サイバー空間と現実世界の交流史(交流図)」は、それを主として時系列で見ようとする試みだった。「グーグルからフェイスブックへ」という表現を使い、そこに現実世界の復権を見ようともしてきた。

そして情報倫理は、この社会をどう生きるかを示す「処世訓」と言ってもいいかもしれない(2)。ここに、法やルールとは違う情報倫理の役割がある。現代においては、強制力をもった法や自発的なルールを整備する前に、これまでの常識を覆すような事態が起こる。人工知能の「フレーム問題」(あらかじめ「グラスを持って、人間は死なない」といった自明なことを記述せざるを得ないという難題)ではないが、激動するIT社会のあらゆる行動基準を法やルールで定めることは不可能である。

大岡昇平「野火」で、左手が右手の動きを思わず止めたような行動は、自律的な心の作用=倫理によって担われるしかない。しかもIT社会で新たに生起する問題は、これまでの伝統的倫理ではとっさに対応できない。そこに生ずる「指針の空白」を埋めようとするのが情報倫理である。

現実世界とはまるで違う原理に基づくサイバー空間の登場で、これまで合理的だったり、有益だったりした生き方が変容を迫られている。古くからの伝統的倫理の多くはIT社会でもそのまま受け継がれるべきだが、それがいま急速にかつ大々的に失われ、一方で、サイバー空間のもつ特性がこれまでとは違う生き方を私たちに要請している。だからこそ現実世界とはまるで違うサイバー空間の特性を理解したうえで、これからの私たちの生き方を抜本的に考え直す情報倫理、「情報のデジタル化が引き起こす問題に有効に対応するための倫理」が必要だと思われる。

法とルール役割が重要なのはもちろんである。現に不正アクセス防止法、個人情報保護法、電子署名法などの法整備が行われているし、各種の団体や組織が自発的なルール（倫理綱領など）を定め、それぞれ効果を上げている。情報倫理は単独で機能するばかりでなく、法やルールを支えるものとしても重要である。

サイバー空間（およびそれと密接に結びついた現実世界）はシームレスにつながっている。そこでは大人と子どもの区別すらもあいまいになっており、大人が築き上げた伝統を子どもに教えるといった時間的余裕も、すでにない。大人も子どもも同時に荒波に立ち向かわなくてはならない。先にも引用した応用倫理学の泰斗、加藤尚武は「自分で判断するとき、どうすればいいかという意思決定の予行演習（決議論）が倫理学の本質」（3）だと述べている。

これからの処世訓（処方箋）を練り上げ、社会的合意にまで高めることが情報倫理の目的である。そして情報倫理教育は、なるべく早期に、しかも幼少期から実施すべきだと思われる。

<注>

（1）宮台真司『日本の難点』（幻冬舎新書、2009年、P35）

（2）井上ひさしの遺作となった小説『一週間』（2010年、新潮社）に「われわれ人間が生きて行くためには、世界がどんなふうに行っているかという世界観と、世界がそんなふうに行っているならこう生きようという処世訓が必要」（P338）とのくだりがある。思わず膝を打って、この比喻を借用した。

（3）加藤尚武『応用倫理学のすすめ』（丸善ライブラリー、1994年、あとがき）

まことにつたなく、しかも、あまり効果も上げなかった「愚問賢答」コラムはこれでおしまいです（^o^）。ご愛読どうもありがとうございました。今後ともサイバーリテラシーへのご理解、ご支援をいただければ幸いです。

サイバーリテラシー研究所ウェブは<http://www.cyber-literacy.com>、私のメールアドレスは yano@cyber-literacy.com です。フェイスブックでもお会いできます。それでは。